海外子女教育だより

気球船

第２０３号
平成１８年１１月
文部科学省
初等中等教育局
国際教育課
編集・発行
初版発行昭和62年12月

海外子女教育総合HP：http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/main7_a2.htm

世界の窓

グァテマラ日本人学校における特色ある教育活動の取り組み

グァテマラ日本人学校
校長　　花本　邦次

雨が上がると陽光に輝く木々の緑が目に染みます。『グァテマラ』とは緑が豊かなところという意味だそうですが、その緑がもっとも美しくきらめく季節になりました。緑は平和の色、生命の色、そして未来に向かって育ちゆく子どもたちの色。その子どもたちのために、本校では小規模校としての良さを活かした教育活動を展開しています。

小規模校であるということは、一人ひとりの行動や性格が把握でき、温かでていねいな指導をすることが可能です。そのため、子どもたちは、先生たちから理解され、大切にされているという感情を持つことができます。そのことで、子どもたちの自尊感情を育てることができます。他者を尊重することができるためには、その子ども自身がかけがえのない存在として慈しまれることが必要です。『自分は大事な価値ある存在だ』という自尊心を持つことができて、初めて自信をもって他者と関わることが可能になり、他者を大事な価値ある存在として認めることができるようになるのです。さらに、大事な他者と良好な関係を作りたいと望み、社会のルールや物事の善悪を判断する規範意識を身につけることができます。また、自尊心があってこそ、今が楽しければよいという、刹那的な生き方や衝動的な行動をコントロールして、未来へと自分の視野を広げ、努力することができるようになります。

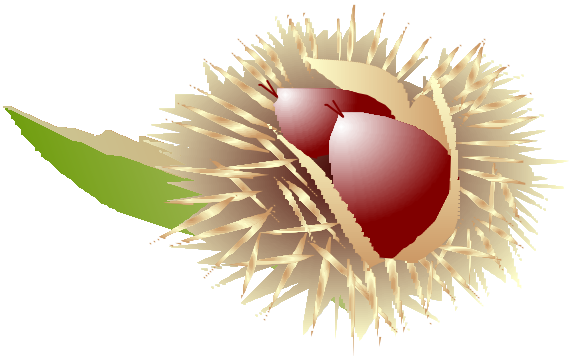
子どもたちをそのように成長させたいと願い、平成16年度・17年度にわたって、海外子女教育研究協力校の指定を受けて、『特別な支援を必要とする児童生徒に対する教育の推進』をテーマに掲げ、自閉症児を普通学級に受け入れた教育活動を展開しました。自閉症児は、入学当初うまく人間関係を結ぶことができない状態でしたが、積極的に指導し関わるようになってからは、場面によっては、一緒に遊ぶことができるようになり、さらに、授業に集中できない状態から、落ち着いて学習に取り組む姿が見られるようになりました。将来の自立をめざして、お金の使い方やメール・郵便の出し方、ミシンや包丁の使い方にまで指導を進めていきました。その成果は自閉症児の成長だけでなく、周囲の子どもたちにも変容をもたらしました。子どもたちの自閉症児に対する理解が進み、温かい対応で自閉症児を支える関係が築けました。それは、自閉症児のみにとどまらず、周囲の友だちや年下の子どもたちのことを考えて行動できるようになるなど、優しさや思いやりの心を育む結果となりました。子どもたちは、友だちへの温かな対応や言葉かけを心がけているうちに、たくさんのことを学びました。学ぶということは変わるということであり、心を広げることでもあります。自分を大切にしながら、他の人を大切に思う心を持つようにするには、心を広げる努力が必要ですが、周囲の仲間のことを考えているうちに、子どもたちは心を広げ、知らず知らずのうちに、優しさを身につけていました。そのために重要なものは、体験活動であると感じ、子どもたちが、多様な人たちと関わり合う体験活動の重要性を再認識し、より一層の推進を考えました。

マヤ文明への造詣が深い染織の先生から、藍染めを指導していただいていますが、今年は板締め染めやろうけつ染めに挑戦しました。染め上がった作品の藍の色がグァテマラの太陽に照らされ鮮やかに輝きました。また、コーヒーについての学習を農園での体験学習や工場見学、オリジナルコーヒー作りを通して深める学習も行っています。さらに、多くの青年海外協力隊員を本校に

招待して貴重な体験を語ってもらったり、隊員の活動している現地を訪問することで、日本の国際貢献や、人としての生き方をじかに学ぶ機会として活用しています。 読書ラリー」と名付けた読書活動も盛んで、読んだページ数に応じて南北のアメリカ大陸への旅を進めていき、都市に到達するごとに表彰するようにしています。子どもたちの読書への意欲は旺盛で、1年間で 3万ページを突破する子も出てきました。また、保護者有志による、読み聞かせも行われ、味わいのある充実した読書活動が展開されています。授業の合間を利用した 業間マラソン」も活発で、週3回、標高１500メートルの高地で子どもたちと教員が共に汗を流しています。小学部から中学部まで一緒に行動することが多く、昼食は校庭のテントで、昼休みはサッカーをと、全校が一体になって楽しみながら、常に異年齢集団の活動が繰り広げられるなかで、教え合い学び合う豊かな人間関係が育まれ、子どもたちは健やかに成長しています。

校庭にある木が、ぬけるようなグァテマラの青空に大きく枝を張り、毅然とした姿で成長を刻んでいきます。子どもたちがあの木のように、伸び伸びと成長し、来る未来の世界で、自分らしさを発揮しながら、仲間と助け合い協力し合いながら、たくましく育ってほしいと願っています。グァテマラ日本人学校は、今年 29年目の年輪を刻みました。

（参考＝グァテマラ日本人学校
URL=http://www.geocities.jp/ejaponjp/index.html）



トピック

シンガポール日本人学校（クレメンティ校）の英語教育

シンガポール日本人学校　クレメンティ校
校長　　森　　史郎

シンガポール日本人学校は 豊かな国際感覚をもち、世界の人々とつながろうとする人材の育成」（シンガポール日本人学校の基本方針）を図るため、英語教育を重視し、英会話学習をカリキュラムに取り入れた取り組みをすすめてきました。

シンガポール日本人学校における英語教育の取り組みは、学校前史にまでさかのぼりますが、現在においては総合学習の時間も使いながら英会話の時間を確保し、週に４～５時間の学習を進めています。また、１９９５年からイマージョン教育を中学部で導入するなど、英語にふれる機会を多くつくりながら児童･生徒の英会話能力の向上を図ってきました。小学校においては中学校英語の先取りをするのでなく、英語を身近に感じ、学ぶ意欲を高め、何よりも楽しく学習できるよう、英会話の授業での工夫を進めています。また、指導にあたってはネイティブの講師を配置し、子どもたちが臆することなく英語に慣れるよう、また自然な英会話が身につくように環境を整えてきました。

⑴ 英会話スタッフによる取り組み

本校の児童が学ぶ 楽しい英会話」の学習は、15年前に導入されたカリキュラムによるものであり、その後授業内容の改善が図られてきました。

最初は週に 2時間の授業であったものから

徐々に時間数を増やし、小学校においては1，2年生で5時間、3年生から上は4時間の英会話の授業に取り組んでいます。また、教科の中で英語にふれる機会を作ることを目的に、音楽・水泳・図工でのイマージョン授業も取り入れてきました。

英会話の授業

児童の英会話の能力は、日本からきてまだ間のない児童から、もう何年もシンガポール日本人学校に通学し、長く英会話を学ぶ児童、家庭での英語使用が日常的になっている児童など多様な環境の中で生活しています。この差に少しでも対応できるよう、学習集団を能力別に少人数グループに分け、指導内容も能力に応じて増減させています。

授業では英語を使おうとする意欲を高め、自然に英語が身につくよう、日常の生活場面で使用する会話を中心とした学習を進めています。また、ゲームなどを取り入れたアクティビティプログラムや発音指導（フォニックス）も学習内容としています。

イマージョン教育

イマージョン教育は「Immersion 」という英単語から名付けられました。辞書からは「浸す、投入される」等と訳されます。イマージョン教育とは通常の教科学習を外国語で行うプログラムをさします。ここでの英語は、教科を学習するひとつの手段となります。いわば「英語を学ぶ」のではなく、通常の各教科を「英語で学ぶ」ということです。子どもたちは教科の内容を学ぶ過程で英語の能力を習得します。イマージョン教育のねらいは、母語の能力や教科の学習に影響を与えずに、外国語の機能的能力をつけさせることなのです。

シンガポール日本人学校で最初にイマージョン教育を取り入れたのは中学部です。１９９５年からイマージョン教育を取り入れました。体育科からはじまって、美術・家庭科と広がっていきました。小学部ではクレメンティ校が１９９８年からイマージョン教育を取り入れました。はじめは、１・2年生の音楽科イマージョンから実施し、年々対象学年を広げるとともに、体育科（水泳）・図工科でも取り組みが始まりました。

シンガポール日本人学校の児童・生徒に要求されていることの一つは、日本人としてのアイデンティティを保持しながら英語力を強化することです。また、英語圏であるシンガポールに暮らす児童・生徒が日常生活において、より積極的に英語を使って生きる力を育てることです。シンガポールの言語・文化により興味をもち、人々とつながろうとすることは、日本人学校の教育目標でもあります。

言葉は総合力であるとも言われます。言語運用能力は「聞く」「話す」「読む」「書く」の各技能が相乗的効果をもたらしながら総合的に形成され、向上・発展していくものです。

(2)日本人教師による取り組み

子どもたちがその場に応じた言語を使って豊かに表現し、相手とコミュニケーションできる力をつけようと取り組んでいます。行事や各教室で英語にふれる機会をできるだけ設けたり、日本人教師と英会話教師の連携を深めたりしながら、英語教育を推進しています。

生活・総合的な学習の時間を使った取り組み

○学校交流

クレメンティ校では地元の小学校との学校交流を行っています。英会話の授業で身につけた英語を同年代の友だちを相手に使えるよう取り組んでいます。また、学校交流での体験はシンガポールの生活や文化などを学ぶきっかけ（現地理解）となっています。

○シンガポールから学ぶ生活科・総合的な学習

各学年の発達段階に応じて、シンガ

ポール国内の自然、民族、歴史などを調べる活動に取り組んでいます。お店の人へのインタビューなどは、より実践的に英語を使うよい機会となっています。中には英語を使って話すことを恥ずかしいと思う子もいますが、友だちと一緒に話しかけることで、恥ずかしさを乗りこえられるようです。そしてその体験が自信につながっていると思われます。

学校生活の場面で自然に英語が使えるようにする取り組み

○ひとこと英会話

英会話以外の教育活動でも、英語にふれるきっかけとして、毎週一つ学校生活に使えそうな英語フレーズを決め、お昼の校内放送で紹介しています。掲示物として教室や校内に掲示することで、英語を使うムードを高めています。このほかにも、各クラスでは、朝の会や帰りの会の司会を英語でしたり、英語の歌を歌ったりしています。

○校内放送・校内掲示の英語使用

校内放送は、児童会の委員会活動によって運営しています。毎日の朝、昼、帰りの放送は、英語、中国語、マレー語、タミール語であいさつを行うとともに、日本語のアナウンスとともに、簡単なフレーズは英語でのアナウンスも流しています。校内の英語スタッフを意識するとともに、自然に英語の聞こえる学校の雰囲気づくりを目指しています。

(3)学校での取り組みから

本校にはたくさんの転入生がやってきます。保護者のみなさまには、本校の特徴的な取り組みとして必ず英語教育のお話をするようにしています。なぜなら、「これだけの時間を割いて英語教育が行われているのだから、我が子も英語が話せるようになるのでは」という安易な期待をかけられないように配慮するためです。シンガポールにはたくさんのインターナショナル校があり、そこでは一日の学校生活そのものが英語環境となっています。 最近はインター校に日本人クラスがあり、英語を学ぶところからスタートするようなシステムもあるらしいが・・)英会話力の上達や英語のスキルだけでインター校と日本人学校が比較されては困るからです。

日本人学校は日本語による学習、それも日本のカリキュラムに沿った学習を行うところであり、英会話は「おまけ」というぐらいに考えてほしいこともお伝えしています。英語の力をどれだけつけるかということでインター校と張り合う必要もないと考えています。将来にわたり英語環境で暮らすことが予想される場合には、むしろインター校に行くことで、その力を育てる方が正しい選択かもしれません。英語の早期教育が言われると、まるでブームのように早期教育に子どもを入れようとする傾向が、最近の若いお母さん方の一部に見られます。シンガポールに暮らす保護者の中で早期英語教育に対する意見交換がインターネットの掲示板を使って行われたこともあります。そこでは「日本人学校かインター校か」という選択をテーマに論戦が繰り広げられました。多くのお母さん方はきわめて冷静に、ブームに流されることなく、子どもが将来どのような環境の中で暮らすのかも含めた学校選択が大事であることを主張する意見が多くみられました。

今、日本人学校に転入してこられる子どもたちの保護者は、そういったことも含めて学校を選択しておられるためか、「おまけ」としての英会話のカリキュラムに大いに共感・賛同してくださっています。また、その共感はかえって「おまけ」の価値を高めるために工夫と努力をしていかねばという、私たちへのいい意味でのプレッシャーともなっています。

おまけ・・・クレメンティ校では今年3月に「クレメンティ校の英語教育」を紹介したＤＶＤを作成しました。ご希望の方がおられましたらそのＤＶＤを差し上げますので、学校（クレメンティ校）までお問い合わせ下さい。

（参考＝シンガポール日本人学校クレメンティ校 URL=http://www.sjs.edu.sg/clehptop/enter.htm）

南西アジア中東アフリカ地区日本人学校校長研究協議会に参加して

国際理解教育専門官　池田　三喜男

平成18年度南西アジア中東アフリカ地区日本人学校校長研究協議会がスリランカのコロンボにおいて10月4日～6日の 3日間の日程で開催されました。

開催日の前日夜 23：10にコロンボの空港に到着し、一路ホテルへ向かいましたが、その間2度、武装した警察に検問にあい、改めて治安が厳しいことを実感しました。

さて、校長研究協議会ですが、文部科学省提案の協議題「魅力ある日本人学校づくりの工夫について」（副題　①日本人学校における英語教育の充実、小学校英語教育に向けて、②児童生徒を獲得するための「情報発信の在り方」、③希望する外国人に対する学校への受け入れ）に対して、本地区は①「日本人学校における英語教育の充実、小学校英語教育に向けて」と②児童生徒を獲得するための「情報発信の在り方」「外国人児童生徒の受け入れ」についての 2つのテーマを設定していました。

この２テーマについて国際理解教育専門官という立場で申し上げます。

①のテーマについては、まさしく今、中央教育審議会の関係部会で議論されているところなので時宜を得たテーマだと思います。

ほとんどの日本人学校は、小学校でも英語の時間を設けています。しかし、大部分が現地採用教員等が単独で授業を行っています。中央教育審議会外国語専門部会の中間報告では、英語教育の指導は「教諭と外国語指導助手等との TT を基本とする。」と述べられております。この際、日本人学校の英語教育の実践においては TT による方法も取り入れてみては如何でしょうか。

②についてですが、児童生徒の減少の一因に保護者のニーズとして英語を身に付けさせるためインターナショナルスクール等に入学させているとのことです。外国語専門部会においては、小学校英語教育を充実するに当たっては、日本人としての基盤となる国語力の育成はすべての教育活動を通じて重視される必要があると述べております。校長においては、インターナショナルスクールに入学させている保護者へ、全ての教科の基本となる国語（日本語を含む）の重要性を説明された上で日本人学校の取組みを紹介しては如何でしょうか。

次に地区別研究協議会の議題についてですが本地区では、①校長と学校運営委員会の役割と②派遣教員配偶者の活用でした。この２つのテーマは、以前から続く懸案事項で事例や内容を変えて繰り返し議論されているテーマのようです。

①については、文部科学省で「在外教育施設経営参考資料（平成 14年刊行）をはじめ「在外教育施設における学校運営委員会の管理責任と派遣教員の職務について（通知）」（平成15年8月28日）や、「気球船本年8月号」などで学校運営委員

会等の役割を明らかにしていますが、未だに一部の日本人学校では、双方で共通の認識が図られていないようです。運営委員は1年交代であったり、校長も3年で交代してしまい、十分な引継ぎがなされていないのではないでしょうか。再度、両者の役割分担を確認し、責任ある体制で学校を運営していただきたいと思います。

②については、以前は派遣教員配偶者とその他の保護者との構図で様々な課題が生じていましたが、近年は、派遣教員配偶者自身の意識が多様化し、学校の各種活動への協力や活用が難しくなっているとのことです。派遣教員の配偶者におかれましては、何故、派遣前に配偶者研修を実施しているのか、都道府県教育委員会等が復職の途を開いているのかなど、自分の置かれている立場を再確認した上で、可能な限り学校支援活動に関わっていただきたいと思います。

校長研究協議会の期間中、コロンボ日本人学校を訪問しました。最初に見させていただいたのは学校紹介ビデオでした。映像を通して日本人学校の特色、課題が語りかけてくるようでした。校長をはじめとする派遣教員の並々ならぬ努力の成果の結果だと思います。休み時間には、子どもにサインを求められ、再びこの仕事の大切さを認識したところです。

校長研究協議会に参加された校長先生、そして配偶者の方々にお願いです。本協議会の内容は、必ず任地の在外公館担当領事、学校運営委員会、そして所属する派遣教員、配偶者に報告してください。研究協議会の究極の目的は、子どもたちのために何ができるかです。換言すれば、成果のない研究協議会など不要です。

コロンボでの校長研究協議会に先立ち、ニューデリー日本人学校を訪問しました。派遣教員との意見交換の場で、全ての先生からそれぞれ自身が行っている教育実践の説明を受けました。課題や悩みを抱えつつ、それを乗り越えて行こうとする姿には頭が下がる思いでした。

最後に、今回の校長研究協議会とニューデリー日本人学校訪問に当たり、在外公館、学校運営委員会の方々、そして本地区の校長先生に改めてお礼申し上げます。

北米・中南米出張報告

海外子女教育専門官　新津　勝二

1．補習授業校派遣教員研究協議会

10月16日～17日、シカゴで行われた補習授業校研究協議会に出席しました。北米を中心に35校の先生方が『魅力ある補習授業校づくりの工夫』についての研究協議テーマを基に、国語教育の充実、学校運営の改善、現地採用教員の管理等について活発な議論が展開されました。また、会議の合間を利用して個別協議も行いましたが、補習授業校に通う児童生徒が減少している中、各校が抱える課題も共通点が数多く見られました。

①保護者のニーズや子どもの実態の多様化
②保護者の現地校志向及び不適応問題
③派遣教員支援体制の在り方
④現地採用教員の確保及び指導力向上

特に、④については「派遣教員は国費で来ているのだから雑務もやってあたりまえ」「当然派遣されるもの」といった受入側の思い違いが存在するとの報告もありましたので、今後の派遣者のためにも必要なところは協力して改善していきましょうと誓い合ったところです。帰国後、早速何校かの運営委員会に支援体制の確認を行いました。設立当初の支援体制が薄れることのないよう今後も継続して注視していかなければと思っています。

2日間という短い日程ではありましたが、深夜に及ぶ集団協議も含め極めて密度の濃い研究協議会となりました。

2．中南米地区日本人学校校長研究協議会

翌週10月23～25日、パナマで行われた校長研究協議会に昨年に引き続き出席しました。こちらは14校の校長先生方が『魅力ある日本人学校づくりの工夫』についての研究協議テーマを基に、希望する外国人児童生徒の受け入れ、校長と学校運営委員会の役割、派遣教員の管理等について熱の入った議論が行われました。全体として児童生徒数が減少している中南米地区ですが、進出企業はあるものの駐在員の低年齢化や長期化及び晩婚化により就学年齢の子どもたちが増えないという状況がありました。残念ながら、児童生徒数が減少すれば派遣教員定数も減らさざるを得ませんが、校長先生からはこれ以上の削減は

見送って欲しいという要望を多く受けました。その場で「承知しました。」と声高に答えられない状況に、眠れない夜が帰国後も続いております・・・・。

なお、昨年度、配偶者アドバイス集を作成するきっかけとなった、校長配偶者研修会にも出席し意見交換をしました。各地区の研究協議会と同時開催される配偶者研修会ですが、今年度は、全ての地区で文部科学省との意見交換の場を設けています。派遣教員配偶者としての立場も難しい点が多々ありますので、今後も意見交換の場を続ける必要があると考えています。

３．各校訪問

2つの校長研究協議会に出席する間の日程を使って、４校の在外教育施設を訪問しました。

●日本メキシコ学院日本コース

数少ない国際学級（メキシココース）との併設校であり、建学の精神でもある両コースの交流活動を通じた子ども達の国際性を育成するためには非常に恵まれた環境で、最近は教員同士の研究交流も増えているそうです。両コースの授業参観をしましたが、どちらの児童生徒も挨拶が非常によくでき、授業態度がしっかりしていたのが印象に残ります。

なお、学院としての組織の在り方について提言をさせていただきました。

●カラカス日本人学校

治安の悪化により児童生徒数が減少しているため、派遣教員は校長先生を含め７名ですが、その分、チームワークが素晴らしく、個性豊かな先生方が一致団結していました。ボランティアで音楽と書道を指導している校長先生の奥様とともに先生方と夕食をともにすることができましたが、派遣教員の生の姿を拝見した気がします。自分自身も先生方のため、子ども達のためにもっと頑張らなければならないと感じたひと時でした。１２月に大統領選挙が控えているとのことですが、治安が良くなって児童生徒が増えることを願わずにはいられません。

●パナマ日本人学校

校長研究協議会の最終日に訪問をしました。

１年中使用できるプールを所有する恵まれた環境ですが、やはり児童生徒数の減少が課題となっており、主要教科の複式授業を研究していました。他校では保護者の反対意見も強いと聞きますが、派遣教員定数が定員削減の対象になっている今、他の日本人学校でも検討が必要な時期に来ているのではないでしょうか。同校の研究成果に期待したいと思います。

●ワシントン補習授業校

現地校を3校借用し授業を行っており、土曜日の早朝にそのうちの1校にお邪魔して、派遣教員、現地採用教員及び保護者の方の協力による授業の諸準備の様子を拝見しました。フライトの関係で残念ながら授業参観はできませんでしたが、現地採用講師のための諸連絡ノートや当日使う教材、教具等を用意する大変さ、借用校との調整の難しさなど補習授業校派遣教員の職務の複雑な一面を間近で見ることができました。学校HP を改善し更新を毎週行うなどの工夫により、生徒数もここ数年復活してきたとのことであり、これも校長先生はじめ学校関係者の努力の賜物だと感じました。また、保護者に対して、①家庭教育の実施、②学校の管理や運営への参加、という2つの大きな役割があることを示し、補習授業校の運営を保護者の協力のもと成功させている様子がとても良く分かりました。今後の更なる発展を願っています。

４．理事長、運営委員長との懇談

出張中、各校の理事長又は学校運営委員会委員長と懇談する機会がありました。校長先生と意見が噛み合わないというケースもあるようですが、「子ども達のためにどうしたら良いのか」という共通の思いを持つことが大切だと思います。理事長が話された次のエピソードが強く印象に残りました。

理事長として授業参観をする時間はなかなか取れないのが、毎年卒業式に出席すると、泣きながら挨拶をする中学校3年生に対し、それ以上にわんわん泣きながら挨拶を聞く小学校低学年の純真な姿を見ると、涙が止まらなくなる自分がいる。涙がこんなに残っていたのかと思うくらいに・・・。」その話を聞きながら、私自身も涙が溢れて大変でした。やはり在外教育施設は素晴らしい、児童生徒もそしてそこで働く先生方も。

５．出張を終えて

2つの研究協議会と各校訪問の2週間に渡る長期の出張でしたが、先生方はもちろんのこと、派遣教員配偶者の方々から本当に貴重なご意見、要望をいただくことができました。在外における児童生徒・保護者のニーズが多様化している中、海外子女教育の更なる充実を図るため、今後の施策に必ず反映させていきたいと思っています。出張の合間に、配偶者の方々より「おにぎりと漬物」の差し入れをいただきました。本当においしかったです。

出張中お世話になりました関係者の皆様にこの場をお借りして改めて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

出張報告
― フランス、ポルトガル、スペイン ―

教職員派遣係　牧浦　倫子
適応・日本語指導係　臼田　亜紀子

派遣教員のいない補習授業校における教育の充実のため、8月27日から9月4日までフランス、スペイン、ポルトガルの補習授業校、日本人学校を視察しました。

今回の視察の主な目的は、平成16年度・17年度に海外子女教育財団で作成した「補習授業校のための指導計画（CD―ROM）」と、神戸大学発達科学部附属住吉小学校に委嘱して作成した「補習授業校のための日本語力判断基準表及び診断テスト」の活用法教授及び活用状況の把握、改善点を掌握することです。

具体的な訪問先は、

⑴ 平成18年度　フランス地区補習授業校現地採用講師研修会
⑵ マドリッド補習校及びマドリッド日本人学校
⑶ リスボン日本語補習授業校
⑷ バルセロナ補習授業校、バルセロナ日本人学校

です。

（１）フランス地区補習授業校現地採用講師研修会

最初に、フランス地区で開催されている補習授業校の現地採用講師の方の研修会に参加しました。今年度は、アルザス補習授業校が幹事校であり、在ストラスブール日本国総領事館の一室で実施されました。

ストラスブールは、人口約２６万人、フランス東部のライン川左岸に位置しており、ドイツと国境を接しています。

フランス地区での同研修会は、今年で13回目を迎え、複数回参加されている方から初めて参加される方まで、フランス地区補習授業校全１１校のうち１０校から、１９人参加されていました。

フランスの補習授業校では、企業の撤退や学習塾、通信教育の発達などから児童生徒数が減少している状況にあるとのことでした。

研修会においては、川野指導員より「補習授業校のための指導計画（以下「指導計画」という。）」及び「補習授業校のための日本語力判断基準表及び診断テスト（以下「診断テスト」という。）」の具体的な使い方について講義を行いました。

講義では、「指導計画」は日本国内の教育レベル（学習指導要領及び教科書）に準拠しつつ、なおかつ補習授業校の授業形態を考慮した構成になっている旨、具体例を挙げながら説明し、各校で積極的に活用するように助言しました。

また、診断テストについては、診断テストの結果を踏まえて子どもたちのより実態に応じた指導ができることや、テストだけでなく授業の教材としても活用できるので、ぜひ活用してほしい旨説明しました。

なお、利用過程において生じた質問についても、積極的にメール等で川野指導員または全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会に問い合わせてほしいと伝えました。

⑵ マドリッド補習授業校及びマドリッド日本人学校

マドリッドでは、補習授業校の運営委員会委員長、副委員長及び講師の方と会談し、また、日本人学校の授業を参観させていただきました。

マドリッドは、スペインの首都であり人口約300万人、標高650m、イベリア半島のほぼ中央に位置

します。政治、経済、文化の中心であるとともに、新旧コントラストのある観光都市です。マドリッドでは、工場よりも事務所が多く、企業の撤退が進み、駐在員が減少しています。また、日本人学校と補習授業校、インターナショナルスクール校に通う子どもの割合は、おおよそ3:3:3くらいとのことでした。

マドリッド補習授業校は、昭和５９年に日本語補習授業校として開校し、平成８年に在スペイン日本国大使館附属補習授業校となりました。国際結婚の増加により両親のいずれかが外国籍である子どもの比率が高くなっています。そのため、普通クラスと国際クラスに分けて、子どもや保護者の要望に応えています。

マドリッド日本人学校は、昭和５６年に開校し平成 4年に在外教育施設として認定されました。平成 18年度現在、27人の児童生徒が在籍しています。校舎は、１００年前に建てられた歴史ある民家を改装して使用していますが、当時の装飾などがあり重厚的である一方、開放的な明るい雰囲気でした。

授業参観は、小学部の国語科、数学科、スペイン語と中学部の英会話の授業を見せていただきました。児童生徒は明るく積極的に発言し、少人数の良さが生かされている授業でした。

（3）リスボン日本語補習授業校

リスボンは、ポルトガルの首都であり、イベリア半島の最西端に位置し人口約 200万人のポルトガル最大の都市です。

現在のリスボンは、未だ１８世紀の面影を残したアルファマ地区と、1755年のリスボン大地震後再建された新しい建物が立ち並ぶ地区とに分かれ、7つの丘を市内に有する起伏の多い特徴のある街並みとなっています。

リスボンでは、リスボン日本語補習授業校の運営委員長との会談を行いました。リスボン日本語補習授業校は、昭和 48年に日本人会によって開設されました。現在は、小中学部に在籍する 20人の生徒が、土曜日に現地公立中学校の校舎で学んでいます。リスボン日本語補習授業校では、子供たちの意気を揚げるため、写生大会、社会見学や遠足等の学校行事を行なうなどの工夫もされているそうです。「指導計画」については、本計画に基づき年間のシラバスを作成するなど既に活用されていました。また「診断テスト」については、学校に届いたばかりであったため、今後の活用をお願いしてきました。

⑷ バルセロナ補習授業校について

バルセロナは、1977年にカタルーニャ自治州が認められて以来、その州都として、人口１７０万人、スペイン第一の港湾を抱える最大の商工業地域として発展を続けています。文化的には、多数の芸術家を輩出し、サグラダ・ファミリアなどガウディの建築物が今も現存し、万国博覧会や１９92年には夏季オリンピックが開催されるなど文化都市としての一面も持っています。

バルセロナでは、バルセロナ補習授業校の授業参観をさせていただきました。

バルセロナ補習授業校は、昭和 56年に開校し、現在、小中学部で４２人在籍しています。バルセロナには日本人学校もあり、補習授業校は日本人学校の施設を借りています。また、日本人学校の先生方が補習授業校の授業を参観して助言等を行うなど、両校の円滑な交流の様子を感じました。

授業参観は、幼稚部から中学校 1年生までの授業を拝見しましたが、幼稚部や小学校低学年の子どもたちは大変元気よく、楽しそうに授業に参加していました。高学年になるにつれて授業の内容が高度になりますが、真剣に取り組んでいる様子が見られました。

⑸「指導計画」と「診断テスト」の活用状況等について

今回お伺いした補習授業校の「指導計画」の現在の使用状況については、ほとんどの学校で使用されていました。また、使用されていない学校においては、文字化けする、プリントアウトできないといった周辺環境の問題や、以前に配布した「補習授業校のための指導計画作成資料」で足りているとのことでした。また、今後校内研修で活用する予定の学校もありました。学校と子どもの実態に応じて引き続き活用していただきますようお願いいたします。

一方、「診断テスト」については、最近各補習授業校に届いたため、使用されていない状況が多いという状況でしたが、子どもたちの日本語の力をみるために今後活用していきたいとの意見もいただきました。「診断テスト」は、多様な活用方法がありますので、ぜひ検討いただきたいと思います。

⑥ 最後に

今回は、フランス、スペイン、ポルトガルの派遣教員のいない補習授業校を訪問させていただきましたが、どこの学校でも運営委員会の方や講師の方々の補習授業校をはじめとする海外子女教育に対する熱意を肌で感じることができました。また、子どもたちの学ぶ姿や多様な文化背景に起因する課題など日々の業務では見ることができない実態を知ることができ、大変勉強になりました。この度、教えていただいたことを今後の業務に生かしていきたいと思います。

最後になりましたが、この度の訪問では、各学校運営委員会の皆様、日本人学校の先生方、補習授業校の先生方、在外公館の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

REXプログラム派遣教員の米国入国査証問題について

海外子女教育専門官　新津　勝二

海外における日本語学習需要に対応し、我が国学校教育の国際化と、地域レベルの国際交流を促進させるため、国内の中・高等学校教員を海外の中等教育施設に派遣する本プログラムは、平成2年度に創設され、本年度で17期目を迎えています。この間、派遣された先生方の活躍は、現地で高い評価を受け、感謝の意が絶えることはありません。また、帰国後は、本プログラム参加教員が、派遣元教育委員会で外国での経験や知識を発揮して活躍するとともに、『REX － NET』というネットワークを構築し、国際教育、外国語教育、日本語教育に関する諸活動を通して、国内外の教育に大きく貢献しています。

しかしながら、今年度派遣者のうち、米国派遣者については、入国査証問題で数々の生活上の支障が生じてしまいました。これは、赴任1カ月前に在京米大使館より突然査証の変更を求められたことが原因ですが、当課としても情報収集が十分足りなかったと大いに反省しています。現在、本来の査証に戻すため手続きを進めていますが、10月27日に米国国務省及び現地受入側教育委員会を訪問し、意見交換をしてきましたので、その概要を報告します。

1．国務省査証部

①米国としては、REX プログラム及び派遣教員に対して敬意を持っており、本プログラムをストップさせるつもりはない。

② REX 教員の場合、J ビザ（交流訪問者）がふさわしい。

③そのためには米国内にスポンサー機関を見つける必要がある。

④この問題について必要があれば、いつでも問い合わせいただきたい。

2．受入側教育委員会

① REX 教員を派遣していただき本当に感謝している。

②ただし、ビザ問題で苦労している派遣教員のことを考えると新しい契約ができないという状況である。

③受入側としても弁護士と相談しているが、J ビザが適当とのことである。

④来年以降も是非派遣を続けていただきたい。

3．訪問を終えて

外国機関との連絡はどうしてもメールが中心になってしまいますが、今回現地に出張し担当者と直接面談することにより、仕事は相手と向かい合わなければ本当の真意は伝わらないものだということを改めて思い知りました。出張前は、なんて冷たい回答をするのだろうと疑心暗鬼になっていましたが、REX プログラム及び派遣教員に敬意を表し、すごく感謝していることを肌で感じることができただけでも大きな収穫となりました。今後とも先生方が思う存分活躍できるよう取り組んでいきたいと考えています。

編集後記

この秋は、ずっと暖かい日が続き落ち葉も少なかったのですが、最近急に冷え込むようになりました。といっても、ようやく例年並みの寒さになっただけで、特別に寒いわけではないそうです。

一方で、「改正教育基本法案」は、国会で熱い審議が続いています。

「教育は、各国の主権に属する事柄と一般に理解されており」（外務省ＨＰ）、我が国の教育に関する法令が直接海外の在留邦人に適用されることはありませんが、「国」と「教育」の関係が問い直されている状況にあって、海外子女教育も蚊帳の外というわけではありません。

「日本人」であることを国内よりも意識する（させられる？）海外で、「日本人」としてふさわしい教育はどのようなものか、秋の夜長に考えています。

(N)

国際教育課「気球船」編集部

本誌へのご意見、ご感想をお待ちしています。下記までご連絡ください。

連絡先：E-mail:kokukyo@mext.go.jp

こちらも随時募集中です。

○投稿記事

（原稿料は出ません。ご了承ください。）

○新規配信配信依頼

○お願い○

・本誌は、回覧、転送等して、多くの方でご覧ください。

・特に断り書きのない記事については、転載は自由です。

～～11月号の内容～～

【世界の窓】――――――――――――――――――――1

○ **グァテマラ日本人学校における特色ある教育活動の取り組み** ----------1

グァテマラ日本人学校 校長　花本　邦次

【トピック】――――――――――――――――――――2

○ **シンガポール日本人学校（クレメンティ校）の英語教育** ----------2

シンガポール日本人学校　クレメンティ校 校長　森　史郎

○ **南西アジア中東アフリカ地区日本人学校校長研究協議会に参加して** ---------5

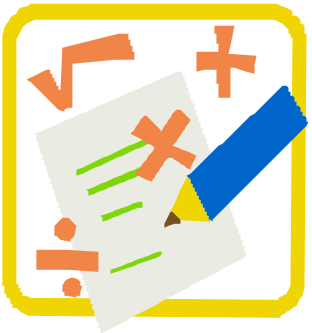
国際理解教育専門官　池田　三喜男

○ **北米・中南米出張報告** ----------6

海外子女教育専門官　新津　勝二

○ **出張報告**
－フランス、ポルトガル、スペイン－ ----8

教職員派遣係　牧浦　倫子
適応・日本語指導係　白田　亜紀子

○ **REXプログラム派遣教員の米国入国査証問題について** ----------10

編集後記 ――――――――――――――――――――11